Ｇ１１０１
報告 602

中学校におけるキャリア・パスポートの効果的な活用に関する研究

－自己理解の深まり，学ぶ意欲の向上を目指して－

田中　淳一（京都市総合教育センター研究課　研究員）

Key Words：キャリア・パスポート，自己理解，学びをつなぐ，振り返り，キャリア・カウンセリング

予測困難で先を見通しづらい現代において，キャリア教育の必要性が高まりをみせている。令和3年度より全面実施となる中学校学習指導要領においても，「一人一人のキャリア形成と自己実現」として，キャリア教育が明確に位置づけられている。それに先行して，令和2年度より全国で導入される教材がキャリア・パスポートである。そこで，中学校におけるキャリア・パスポートの効果的な活用について研究・実践を行った。

キャリア教育を進める上で，自己理解に注目した。キャリア・パスポートを活用し，自己理解に立脚した目標を設定し，振り返りを行うことで，さらに自己理解を深め，次に向けて学ぶ意欲が向上すると考えた。

その手だてとして，振り返りシートとキャリア・カウンセリングシートを活用し，生徒の自己理解が深まる機会を引き出せるようにした。

実践を通して，記述内容の変化および生徒対象のアンケートから，自己理解の深まりがみられ，学ぶ意欲の向上につながることが示唆された。

目　　次

はじめに ･････････････････････････････ 1

第１章　キャリア教育の必要性

第１節　キャリア教育とは
（１）今，求められるキャリア教育 ････････ 1
（２）中学校におけるキャリア教育 ････････ 2

第２節　キャリア教育を通して育む資質・能力
（１）「基礎的・汎用的能力」としての
四つの能力 ･････････････････････ 2
（２）本研究で重点化する資質・能力 ･･････ 3
（３）キャリア・パスポートについて ･･････ 4

第２章　キャリア・パスポートの効果的な
活用に向けて

第１節　本研究におけるキャリア・パスポート
（１）キャリア・パスポートの具体的内容 ･･ 5
（２）キャリア・パスポート活用の流れ ････ 7

第２節　キャリア・パスポートを用いた振り返
りを充実させるために
（１）学びをつなぐ振り返りシート ････････ 7
（２）教師（大人）からの言葉がけ
―キャリア・カウンセリングシート―･･ 8
（３）本研究の構想 ･･････････････････ 9

第３章　実践の具体

第１節　キャリア・パスポート（学年初め）
･････････････････････････････ 10

第２節　間をつなぐ実践
（１）A校の実践―学校行事でつなぐ― ････ 11
（２）B校の実践―生き方探究・チャレンジ体験
を中心としてつなぐ― ･･････････････ 13

第３節　キャリア・パスポート（学年末）
･････････････････････････････ 15

第４章　研究の成果と課題

第１節　研究の成果
（１）生徒の記述内容から ･･････････････ 17
（２）教師（大人）の対話的な関わりから･･･ 19

第２節　課題と今後の展望
（１）実践から明らかになった課題･････････ 19
（２）今後に向けて･･････････････････ 20

おわりに･････････････････････････････ 20

＜ 研 究 担 当 ＞　田中　淳一　　（京都市総合教育センター研究課研究員）

＜研究協力校＞　京都市立春日丘中学校
京都市立岡崎中学校

＜研究協力員＞　井田　圭一　　（京都市立春日丘中学校教諭）
森田　純代　　（京都市立岡崎中学校教諭）

はじめに

中学校では，令和３年度より新学習指導要領が全面実施となるが，その中でキャリア教育の重要性がこれまで以上に強調して示されている。特に特別活動における学級活動の内容として,「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」が設定され，キャリア教育が明確に位置づけられた(1)。

京都市では「生き方探究教育」という名称で，キャリア教育に取り組んでいる(2)。名称は違うが，意味内容は同じである。したがって，本稿では国および先行研究が示す内容には「キャリア教育」，京都市の内容を取り上げる部分には「生き方探究教育」の語をそれぞれ用いることとする。

この名称からも分かるように,キャリア教育は子どもの生き方に関わる教育であり,学校生活を通してさまざまなことを経験しながら,自己を見つめ,将来を見通していくことが重要になる。その意味で，各学校においてキャリア教育につながる実践として,多くの取組を挙げることができるであろう。

しかし一方で，こうした特性を持つがゆえに,何がキャリア教育なのか，今までとの違いはどこにあるのか分かりにくい部分があるようにも感じられる。このような漠然とした理解では，キャリア教育の視点を学校教育におけるさまざまな実践に反映させることは難しいのではないだろうか。

キャリア教育は特定の活動や取組に集約されるものではなく，学校教育全体を通して行われる。そうした中で，最も大切なのはキャリア教育の視点を意識して計画・実践を行うことであると考える。生徒は注目すべき視点が与えられていなければ，その視点に関わる部分に気づかず，見過ごしてしまう可能性が考えられるからである。

本研究は，キャリア教育の必要性をまとめるとともに,キャリア教育の充実に向けた具体的実践,特に「キャリア・パスポート」と呼ばれる教材の効果的な活用について検証したものである。

(1) 文部科学省　「中学校学習指導要領（平成29年告示）」2018.3　p.163

(2) 京都市教育委員会　「京都市生き方探究（キャリア）教育スタンダード」　https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/cms files/contents/0000217/217994/sutandard.pdf

第１章　キャリア教育の必要性

第１節　キャリア教育とは

（１）今，求められるキャリア教育

キャリア教育とは，どのようなものだろうか。中央教育審議会は,「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年，以下「在り方答申」）の中で，キャリア教育を次のように定義している(3)。

> 一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育

この定義により，キャリア教育は一人一人の社会的・職業的自立に向けた教育であり,「必要な基盤となる能力や態度を育てること」が学校教育において求められているものと捉えられる。

では，日本における若者の社会的・職業的自立の現状はどのようなものだろうか。まず，文部科学省・厚生労働省共同の調査(4)によれば，就職希望者のうち，高等学校卒業者の就職率は98.2%，大学卒業者の就職率は97.6%と高水準である。

しかし，厚生労働省の調査(5)によれば，就職後3年以内の離職率は,平成27年度の高等学校卒業者で39.3%，大学卒業者で31.8%に上る。これらの調査から，希望すれば最終的には就職できる者がほとんどである一方で,就職しても3割以上の若者が早期離職しているという現状があるといえる。

そして，内閣府による初職の離職理由に関する調査(6)では，一番多かった項目が「仕事が自分に合わなかったため」(43.4%)，次いで「人間関係がよくなかったため」(23.7%) となっている。また，2018年の若年無業者（15～34歳の非労働力人口のうち家事も通学もしていない者)は53万人で,若年人口の2.1%（約50人に1人）である(7)。

以上のことから，日本における若者の社会的・職業的自立は決して十分でない現状といえよう。

こうした中，新学習指導要領特別活動では，学級活動の内容に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」が設定され，小学校からの教育活動全体を通してキャリア教育を推進することが明確化された(8)。小学校段階から，必要な基盤となる能力や態度を育てることが強調されたことになり，学校教育が果たす役割は大きいと捉えられる。

（２）中学校におけるキャリア教育

中学校におけるキャリア教育については，新学習指導要領総則の「生徒の発達を支える指導の充実」の中に，以下の内容が挙げられている(9)。

> 生徒が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること。その中で，生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう，学校の教育活動全体を通じ，組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。

まず，生徒が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通すことが大切であると捉えられる。学校生活の中で，現在学んでいることが将来につながっているという意識が持てれば，さまざまな活動に取り組む意欲の向上につながるであろう。

また，「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること」が示された。キャリア教育の充実を図るには，学校教育におけるさまざまな場面での学びを，特別活動の時間に振り返り，将来への見通しや今後の学びへつなげていく活動が必要であると考えられる。

そして，特に中学校段階では，生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができる姿が望まれていると理解できる。ほとんどの中学生が高校受験に向け,自らの進路と向き合う中で,いかに主体的に進路を設計していくことができるかが重要であり，この点に寄与することがキャリア教育のもつ大きな役割であるといえるだろう。

なお,「進路指導」という言葉は以前から使われているが，キャリア教育と進路指導は，同じ理念を掲げる教育活動である。藤田（2018）は，両者の関係を，以下の図 1-1 のように示している。

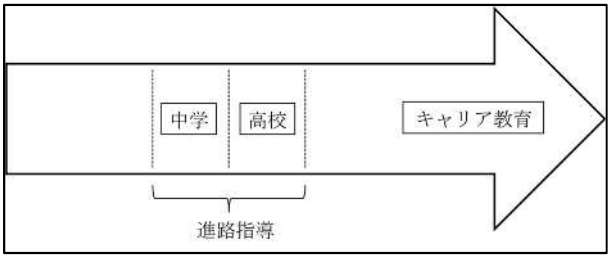


図 1-1　キャリア教育と進路指導との関係(10)

図 1-1 から分かるように，キャリア教育と進路指導との関係は，その対象となる範囲に違いがあるといえる。進路指導は中学校および高等学校に限定されるが，キャリア教育は中学校以前の段階から対象とされていることに加え，若年無業者を支援するさまざまな機関においても実践される。

以上のことから，中学校におけるキャリア教育とは，生徒の主体的な進路選択に向けて，進路指導を充実させていくことでもあるといえるだろう。中学生のほとんどが，自ら選択しての進路決定は初めての経験であることを踏まえれば，中学１・２年生の時から，進学先や職業の紹介のみにとどまらず，社会的・職業的自立に向けた取組を積み重ねておくことが重要であると考えられる。こうした全体を通しての取組こそが進路指導の意味するところであり，生涯を通したキャリア発達をねらいとするキャリア教育でもあると考える。

第２節　キャリア教育を通して育む資質・能力

（１）「基礎的・汎用的能力」としての四つの能力

先述の通り，キャリア教育は，一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる資質・能力を育てることを目標としている。「在り方答申」では，こうした資質・能力を「基礎的・汎用的能力」として,以下の四つの能力に整理している(11)。

> ①人間関係形成・社会形成能力
> ②自己理解・自己管理能力
> ③課題対応能力
> ④キャリアプランニング能力

これらの「基礎的・汎用的能力」は，分野や職業にかかわらず，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力として提唱され,「仕事に就くこと」に焦点を当て整理されたものである(12)。以下，整理されたことをもとに，それぞれの能力についてまとめた内容を順に示すこととする。

①人間関係形成・社会形成能力

社会の中で生活する，あるいは仕事をするとき，他者と協働して取り組むことが必要である。他者と協働する中で，自分の考えが深まったり，自分の知らなかった一面に気づいたりすることができると考えられる。こうした経験を通して，多様な他者を認めつつ，既存の社会に主体的に参画していく態度が培われるであろう。

また，先述の通り，初期の離職理由として二番目に多かったのが人間関係に関わる項目であった。この実態を受け，学校教育の中で他者との関わりを通して学びを深めたり，役割を果たしたりといった経験を蓄積しておくことが，社会に出る準備として大切であると考えられる。

②自己理解・自己管理能力

前向きに考え行動するには，自己に対する理解，特に自分自身のよい点や強み，可能性を含めた肯定的な理解が基盤となる。また，自己の適性や役割を理解することで，将来に対しての見通しをもち，主体的に自らのキャリアを形成していこうとする姿勢につながると考えられる。

しかしながら，自己理解とは肯定的なものだけではない。自分の悪い点や課題について気づくことも大切な自己理解である。そのような場合であっても，他者と対話的に関わりながら，自らの感情を律し，少しでも克服していこうとすることが大切であろう。つまり，自己に対するさまざまな理解を通して主体的な行動につなげていくことができる能力であると捉えられる。

③課題対応能力

主体的な進路選択に向けて，さまざまな活動の中で課題の発見・分析や，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決する経験を積んでおくことが大切であると考えられる。課題解決に向けては，膨大な情報の中から適切な情報を収集・選択する能力等も必要になる。したがって，学校行事等の準備として行われる調べ学習等の機会を通して，課題解決に向けた学習過程を経験しておくことが大切であるだろう。

④キャリアプランニング能力

社会人・職業人として生活していくために，働くことの意義を理解し，今学んでいるさまざまな内容と関連付けながら，一人一人が主体的にキャリアを形成していくことが求められる。そのためには，学校教育におけるさまざまな活動やそこでの経験が将来につながっていることに気づかせるような実践が大切となる。

なお，これら四つの能力は相互に関連し合っている。各校の実態や目指す生徒像と照らし合わせ，育てたい資質・能力を設定し，まずは教師側が意識しておくことが大切であると考えられる。

（２）本研究で重点化する資質・能力

本研究では，特に「自己理解能力」に注目する。その理由を，以下に示す三点に分けて述べる。

一点目は，自己理解能力が，他の能力における基盤であるとされているからである。「在り方答申」では，「自己理解・自己管理能力」の内容として，次のように説明されている(13)。

> この能力は，子供や若者の自信や自己肯定感の低さが指摘される中，「やればできる」と考えて行動できる力である。また，変化の激しい社会にあって多様な他者との協力や協働が求められている中では，自らの思考や感情を律する力や自らを研さんする力がますます重要である。これらは，キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり，とりわけ自己理解能力は，生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある。
>
> （下線は筆者）

下線部より，「自己理解・自己管理能力」が他の能力を形成する上で基盤となることが示されている。加えて，とりわけ自己理解能力については，キャリア教育を通して常に深めていく必要がある，極めて大切な能力であると捉えられる。

二点目は，先述の通り，若者の初期の離職理由として一番多かった項目が「仕事が自分に合わなかったため」とあったからである。社会的・職業的自立に向けて，職業についての理解を深めることはもちろんであるが，自己の適性を理解し，将来を見通すことも大切であるといえるだろう。

三点目は，自己理解が適切な目標設定につながると考えられるからである。キャリア教育においては自分の将来について考えていくが，遠い将来や夢だけを見ていると，今やるべきことに取り組む姿勢にはつながりづらいように感じられる。

しかし，自己理解を深めていれば，現状を踏まえた目標設定になると考えられる。この目標により今何をすべきかが整理されることで，自分の課題を見つめながら前向きに取り組む姿勢をつくるきっかけとなり得るのではないだろうか。

以上の理由より，本研究では特に自己理解能力に注目していきたいと考える。ただ，四つの能力はどれも大切であり，相互に関わり合っているものでもある。したがって，あと三つの能力についても意識に入れた上で，あくまで重点化する能力として自己理解能力を取り上げたいと考えている。

また，これら四つの力は全て包括的な能力概念である。そこで，「在り方答申」の内容を踏まえ，本研究における「自己理解能力」の具体的な内容を，資質・能力の三つの柱に分けて示す形で，以下の表 1-1 のように整理した。

表 1-1　本研究における「自己理解能力」

知識・技能	・自己の適性・役割の理解
思考力・判断力・表現力等	・自分を振り返り，良い点を伸ばし，課題を受け止め，克服していくことができる力
学びに向かう力・人間性等	・前向きに考える力 ・主体的に行動し，進んで学ぼうとする力

この「自己理解能力」に重点化しつつ，本研究において目指す生徒像は，「将来を前向きに考え，学ぶ意欲をもって取り組む生徒」とした。思春期の発達段階にあり，多感な時期である中学生が，変化の激しい社会や将来に対し，自己理解を深める中で少しでも前向きに捉え，社会的・職業的自立に向かってほしいとの思いがある。自己理解を適切な目標設定につなげることにより，学校でのさまざまな取組に主体的に臨むことができるきっかけとなるのではないかと考えている。

（３）キャリア・パスポートについて

キャリア教育が特別活動を要としていることは先述したが，その際に活用する教材が「キャリア・パスポート」である。中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成 28 年）の中で，キャリア・パスポートについて以下のように明記されている(14)。

> 教育課程全体で行うキャリア教育の中で，特別活動が中核的に果たす役割を明確にするため，小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について，学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材（「キャリア・パスポート（仮称）」）を作成することが求められる。

キャリア・パスポートは仮称であるが，「ここでの『パスポート』とは，公文書である旅券という本来の意味を超えて，学びの履歴を積み重ねていくことにより，過去の履歴を振り返ったり，将来の学びの予定を考え積み重ねたりしていくことを支援する仕組みを指すものである」(15)との説明もある。キャリア教育において，生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通すことが大切であることは先述したが，キャリア・パスポートを用いることで過去の学びを振り返り，将来に対しての見通しをもつことにつながると考えられる。

また，新学習指導要領総則においても，特別活動における学級活動の「3　内容の取扱い」の項目として，次のような記述がある(16)。

> (2)　2 の(3)（「一人一人のキャリア形成と自己実現」：引用者注）の指導に当たっては，学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際，生徒が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。

キャリア教育において要となる，特別活動における学級活動の中で，学習や生活の見通しを立てることや，学んだことを振り返ることが求められていると分かる。そして，その際に活用する「生徒が活動を記録し蓄積する教材等」とは，キャリア・パスポートを指すものと捉えられる。

さらに，中学校学習指導要領解説　特別活動編では，こうした教材を活用した活動を行う意義として，以下の三点を挙げている(17)。

> ①　中学校の教育活動で行うキャリア教育の要としての特別活動の意義が明確になる
> ②　小学校から中学校，高等学校へと系統的なキャリア教育を進めることに資する
> ③　生徒にとっては自己理解を深めるためのものとなり，教師にとっては生徒理解を深めるためのものとなる

①，②は，これまで述べてきた内容と重なっている。キャリア・パスポートを活用することで，キャリア教育を進める上で大切にすべき意義が明確になることが期待されているといえるだろう。

本研究で特に注目したいのは③である。生徒は振り返りを積み重ねることで，以前と比べて成長

を感じたり，自分の良い点や課題が整理されたりといったように，自己理解を深めていくことができると考えられる。その際に，生徒同士あるいは教師が対話的に関わることによって，より多面的な自己理解となるのであり，教師側からみれば生徒理解をさらに深めることになるであろう。

次章では，本研究で用いるキャリア・パスポートについて，そしてキャリア・パスポートを用いた振り返りをより効果的なものとするための実践における要点について明らかにしていきたい。

(3) 文部科学省 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」 2011.1.31 p.17 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf 2020.3.1

(4) 文部科学省（同時発表：厚生労働省） 「大学等卒業者及び高校卒業者の就職状況調査」 2019.5.17 p.1 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/05/__icsFiles/afieldfile/2019/05/17/1414182.pdf 2020.3.1

(5) 厚生労働省 「学歴就職後3年以内離職率の推移」 https://www.mhlw.go.jp/content/11650000/000369541.pdf 2020.3.1

(6) 内閣府 「特集 就労等に関する若者の意識」 https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h30honpen/s0_0.html 2020.3.1

(7) 総務省統計局 「労働力調査（基本集計）」 p.17 https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf 2020.3.1

(8) 文部科学省 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」東山書房 2018.11.15 p.8

(9) 前掲(1) p.25

(10) 藤田晃之編著 「キャリア教育」ミネルヴァ書房 2018.11.30 p.6

(11) 前掲(3) pp.25-26

(12) 前掲(3) p.25

(13) 前掲(3) p.26

(14) 文部科学省 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 2016.12.21 pp.234-235 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf 2020.3.1

(15) 前掲(14) p.56

(16) 前掲(1) p.164

(17) 前掲(8) p.72

第２章 キャリア・パスポートの効果的な活用に向けて

第１節 本研究におけるキャリア・パスポート

（１）キャリア・パスポートの具体的内容

キャリア・パスポートは，令和2年度より全ての小学校・中学校・高等学校において導入される。

そうした中，本研究で用いるキャリア・パスポート（以下，研究版CP）を，以下のように作成した。まず，学年初めに実施することを想定した研究版CPから掲載する。内容は図2-1のようになる。

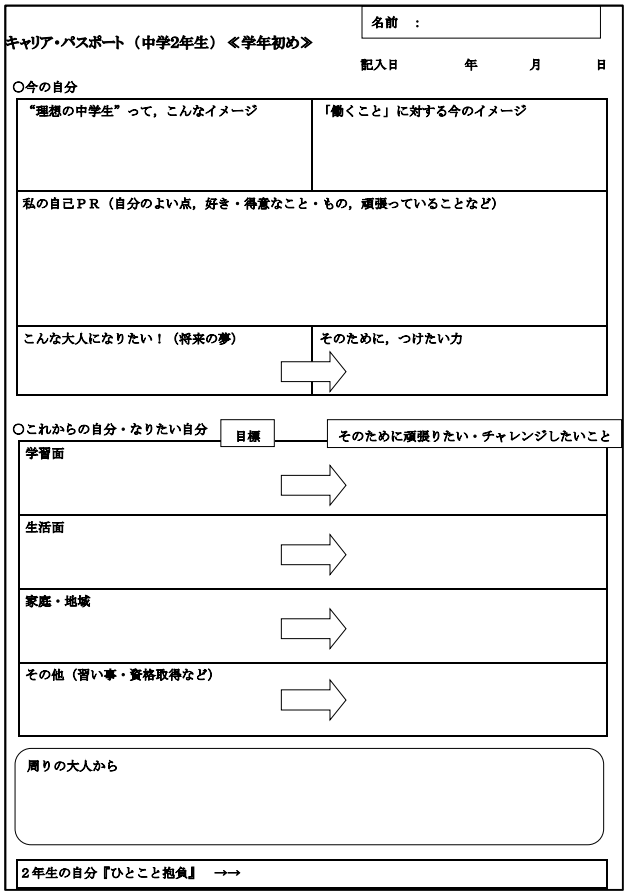


図2-1 研究版キャリア・パスポート（学年初め）

この研究版CPは,国の例示資料を参考にしつつ,以下の点を意識して独自で作成したものである。

上段には,「今の自分」について書く欄を設定し,生徒の自己理解が促されるような項目を挙げた。

まず,「理想の中学生」の項目では,中学校3年間を通してどのような姿になりたいかイメージすることをねらいとしている。中学校生活を通して近づきたい理想像を大まかに見通しておくことにより，中学生としての自覚や活動意欲を高めることができると考えた。

次に,「働くことに対する今のイメージ」の項目を設定している。中学２年生で職場体験が行われる学校が多いことを踏まえ，体験活動前に働くことに対するイメージを書き残しておくことが大切であると考えた。そして，ここでの記述を学年末のキャリア・パスポートにつなげることで，生徒自身が意識の変容に気づくことができるであろう。

そして，本研究で最も注目するのが「私の自己PR」の項目である。自己理解の中でも，自己に対する肯定的な理解（自分のよい点，好き・得意なもの・こと，頑張っていることなど）を深めることにより，学びへの意欲や自信へとつながっていくと考えられる。本研究では，この自己PR欄を少しでも自信をもって記述できるような生徒の姿を理想としている。書くことを強制しては逆効果であるが，一人一人の生徒が前向きに書き進められるよう,取組を蓄積しておくことが大切と考える。

「こんな大人になりたい！（将来の夢）」および「そのために，つけたい力」の項目は，遠い将来を見通すことを想定している。なりたい職業を書くことはもちろんであるが，大人の理想像を想像した時の特徴等をまとめてもよい。自己理解に立脚しながら，現時点での将来像を思い描き，記録として蓄積しておくことがねらいである。

中段には,「これからの自分・なりたい自分」の欄を設定し，学習面，生活面，家庭・地域，その他の四つの面について「目標」および「そのために頑張りたい・チャレンジしたいこと」を意思決定する。この項目は国の例示資料を踏襲している。

また，生徒のキャリア発達を促す上で，教師や保護者などの大人との対話的な関わりが重要であるとされている(18)。したがって,「周りの大人から」という項目を設け，その内容を受けて最後に生徒が「ひとこと抱負」を記入するという流れとなるよう作成した。大人からの肯定的な関わりにより，生徒がさらに自信や自己理解を深め，目標達成への意欲を一層高めることがねらいである。

続いて，学年末に実施することを想定した研究版CPを掲載する。内容は右段の図2-2の通りである。

学年末の研究版 CP では,まず「印象に残った(影響を受けた）出来事や場面」および「選んだ理由」の項目を設定した。一年間に経験した出来事を思い出しながら，自身の成長を実感することがねらいである。そのためには，より具体的な場面が記述できるよう，日々の教育活動における振り返りを記録し，蓄積しておくことが大切となる。

その下に位置するのが，自己理解に関わる項目

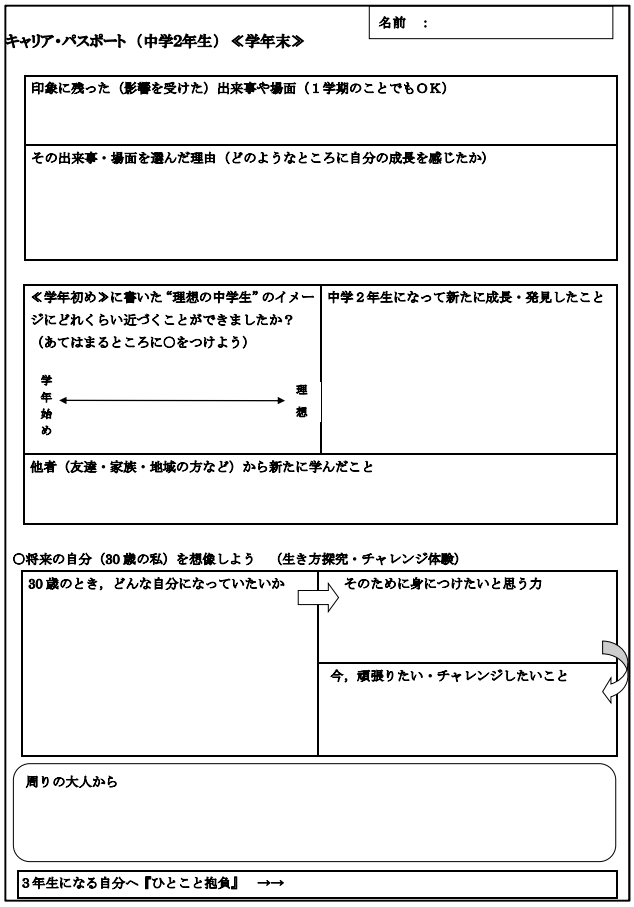


図 2-2　研究版キャリア・パスポート（学年末）

である。学年初めのキャリア・パスポートを参照しながら,「理想の中学生のイメージにどれくらい近づくことができたか」および「中学２年生になって新たに成長・発見したこと」を記入する。この「新たに成長・発見したこと」が，学年末の研究版 CP において最も注目する項目である。自己に対する新たな気づきを書き記すことができれば，以前と比べて成長を感じつつ，自己理解をさらに深めることができると考えられるからである。

加えて,「他者（友達・家族・地域の方など）から新たに学んだこと」の項目も設定した。自己理解は自分との対話だけでなく，他者から見た自分についてコメントをもらったり，他者について知る中で自分に対する理解も深まったりといった効果が生まれると考えられる。福島（2015）は,「自己理解とは，自分を知り理解すること，自分自身に関する理解のことです。そして，自分を知り，理解するための手がかりには，身近な人から直接あるいは間接的に指摘された経験や身近な人の行動によって自分を省みる経験などが含まれます」(19) と述べている。他者から得られる自己理解を大切にすることで,振り返りの内容が自己満足とな

らず,より客観的なものとなることが期待できる。

そして,「30 歳のとき，どんな自分になっていたいか」を考え記入する項目を設定した。本市における職場体験である「生き方探究・チャレンジ体験」での学びを生かし，将来を考える機会とすることがねらいである。30 歳という年齢は，多くの者が働いて数年経っている，あるいは進路が決まっているであろう時期として想定されており，国の例示資料にも記載がある。大人になった自分をできる限り具体的にイメージするとともに,「そのために身につけたいと思う力」や「今，頑張りたい・チャレンジしたいこと」を意思決定する。

学年初め，学年末どちらのキャリア・パスポートにおいても，まず今までの学びを振り返り，他者との交流により自己理解を深めつつ，将来に向けて意思決定していくという流れを構想した。この流れに沿って記述していくことにより，学校生活での学びとつながりをもたせながら，より具体的な振り返り，そして次への目標設定を行うことができると考えられる。キャリア・パスポートを通して，過去の学びを振り返る中で現在の自分が成長していることに気づくとともに，今後の課題を未来へとつないでいくことが大切である。

（２）キャリア・パスポート活用の流れ

本研究におけるキャリア・パスポート活用の流れは，以下の図 2-3 の通りである。

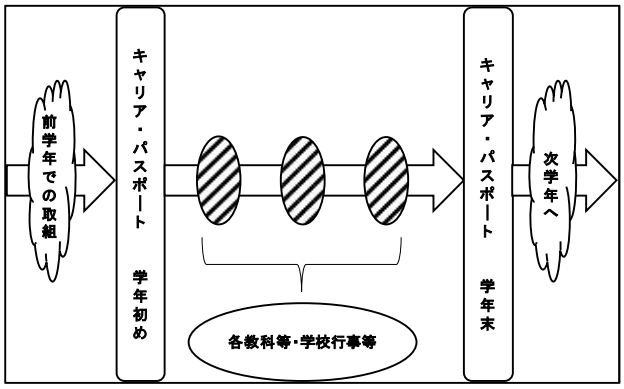


図 2-3　キャリア・パスポート活用の流れ

図 2-3 のように，キャリア・パスポートの位置づけは学年初めと学年末の二種類とした。ただ，その間に学校生活を送る中で生徒が経験する取組（各教科等・学校行事等）を大切にし，学びをつなぎ自己理解を深めることが極めて重要である。

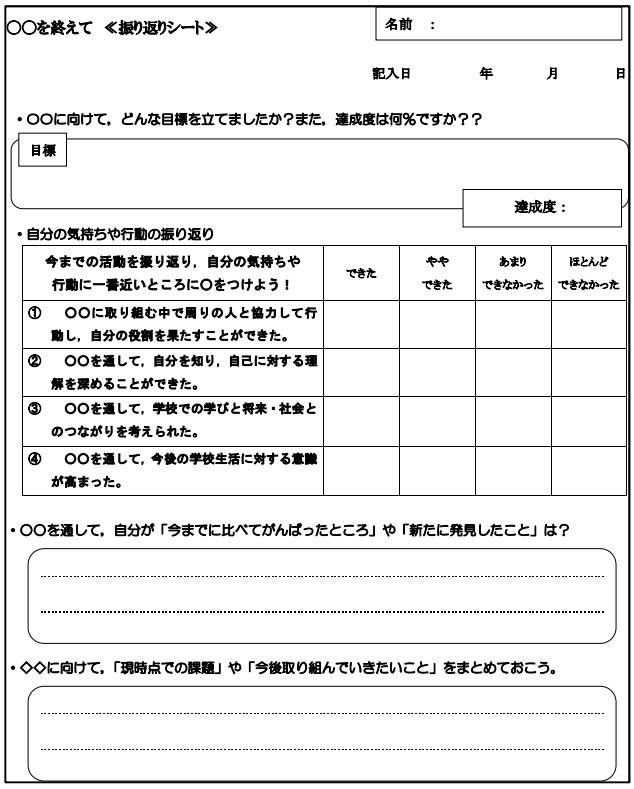
なお，京都市版のキャリア・パスポートとして今年度 11 月に示された「生き方探究パスポート」も,学年初めおよび学年末の二枚のみをキャリア・パスポートとしている。本研究でも同じ位置づけとしつつ，自己理解に重点化して実践を行った。

第２節　キャリア・パスポートを用いた振り返りを充実させるために

（１）学びをつなぐ振り返りシート

キャリア・パスポートを用いた実践が，目標や振り返りを書く単発的な作業だけの時間になってしまえば，今やるべきことに取り組もうと意欲を持ったり，将来を見通したりすることにはつながりにくいであろう。そうした意味でも，どのように学年初めと学年末の間をつなぐかが重要となる。

その具体例として，学校行事をもとに学びをつなぐ振り返りシートを作成した。振り返りシートの様式・内容は，図 2-4 のようなものである。



○○を終えて　≪振り返りシート≫　　名前　：

記入日　　年　　月　　日

・○○に向けて，どんな目標を立てましたか？また，達成度は何％ですか？？

目標

達成度：

・自分の気持ちや行動の振り返り

今までの活動を振り返り，自分の気持ちや行動に一番近いところに○をつけよう！	できた	やや できた	あまり できなかった	ほとんど できなかった
①　○○に取り組む中で周りの人と協力して行動し，自分の役割を果たすことができた。				
②　○○を通して，自分を知り，自己に対する理解を深めることができた。				
③　○○を通して，学校での学びと将来・社会とのつながりを考えられた。				
④　○○を通して，今後の学校生活に対する意識が高まった。				

・○○を通して，自分が「今までに比べてがんばったところ」や「新たに発見したこと」は？

・◇◇に向けて，「現時点での課題」や「今後取り組んでいきたいこと」をまとめておこう。

図 2-4　振り返りシート

中学校では，合唱祭や文化祭などの学校行事がある。そうした行事を大切にしつつ，今までの学びを生かして目標を設定し，取組を通して振り返り，次の学びにつなげていく過程が大切であると考える。本研究では，生徒にとって大きな成長の機会であるものの，それぞれが単発で捉えられがちな学校行事での学びをつなぐ実践を行った。

図 2-4 の振り返りシートは，「○○を終えて」とタイトルをつけている。○○の部分に各校での取組を自由に設定することで，さまざまな教育活動に対し共通様式として振り返りを行い，蓄積していくことができると考えた。また，シートの一番下の設問は「◇◇に向けて」と表記しているが，これは次の取組を設定することを想定している。

例えば，合唱祭において，上手くいかない時でも前向きに取り組むことを成果や課題として挙げ，次の文化祭の取組につなげるなどが考えられる。

また，キャリア教育を進める上で大きな意味をもつ職場体験学習についても，単発的な取組にしてしまうのではなく，事前・事後学習を含め，学びをつなぐという視点が大切になると考える。職場体験学習において，事前・事後指導の不足がみられる場合があることは，これまでにも指摘されているが(20)，取組ごとの「目標」と「振り返り」を重視し，生徒が学びのつながりを実感しながら自己理解を深め，キャリア発達を促すことができるような実践が求められるだろう。

なお，本市では「生き方探究・チャレンジ体験」として，ほとんどの公立中学校で職場体験学習が行われている。したがって，生き方探究・チャレンジ体験の充実は，本市における生き方探究教育を推進する上で不可欠であると考えられる。

ここで，振り返りシートの内容について説明を加える。まず上段に，目標と達成度を記入する欄を設定した。「基礎的・汎用的能力」のうち「課題対応能力」に関わる項目として取り上げている。

中段には，四つの質問項目について四段階で評価する欄を設定した。四つの項目は，国の例示資料に記載されている質問項目を参考にしている。「人間関係形成・社会形成能力」，「自己理解・自己管理能力」，「キャリアプランニング能力」に関わる項目とし，ここまでの項目で四つの「基礎的・汎用的能力」がすべて盛り込まれるようにした。

そして，下段の二つの設問は，どちらも自己理解に関わる項目である。一つは「今までに比べてがんばったこと」や「新たに発見したこと」を記入する欄であり，自分の成長を実感し，肯定的な自己理解を促し，深めることをねらいとしている。もう一つは「現時点での課題」や「今後取り組んでいきたいこと」を記入する欄であり，さらに成長していきたい部分や次に向けて取り組んでいきたいことを意思決定する。ここでまとめた内容を次の学校行事へとつなぐことで，自己理解の深まりや，さらなる意欲の向上につながると考える。

振り返りシートの項目と先述した「基礎的・汎用的能力」の対応を，表 2-1 でまとめて示す。

表 2-1　「基礎的・汎用的能力」と振り返りシート

人間関係形成・社会形成能力	「自分の気持ちや行動の振り返り」設問①
自己理解･自己管理能力	「自分の気持ちや行動の振り返り」設問②，④ 下段の記述欄（成果と課題）
課題対応能力	目標および達成度
キャリアプランニング能力	「自分の気持ちや行動の振り返り」設問③

（２）教師（大人）からの言葉がけ
―キャリア・カウンセリングシート―

キャリア教育を進める上で，周りの大人との関わりが大切であることは先述したが，学校においては教師からの言葉がけが鍵を握ると考えられる。キャリア教育においては，「対話的」「共感的」「肯定的」な言葉がけが重要であるとされている(21)。そうした言葉がけの例として，図 2-5 のようなキャリア・カウンセリングシートを作成した。

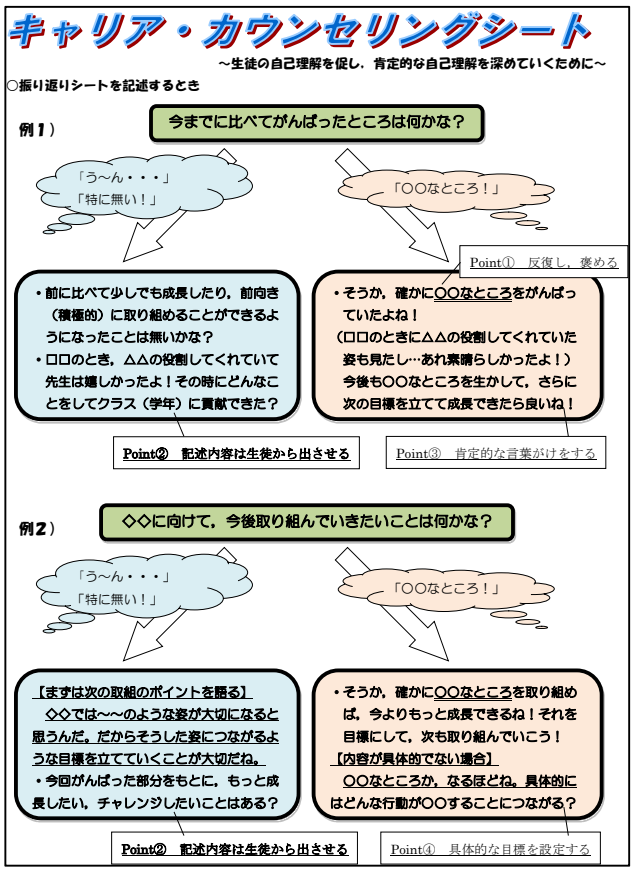


図 2-5　キャリア・カウンセリングシート

キャリア教育において，生徒のキャリア発達を促す（支援する）営みはキャリア・カウンセリングとよばれる。「すべての生徒に必ず効果がある」という万能な言葉がけは存在しないが，「対話的」「共感的」「肯定的」な言葉がけのイメージが少しでも膨らむよう，一例として作成した。

図 2-5 は，振り返りシートを記述する際の，教師からの言葉がけの例について記載したものである。振り返りでは，積極的に書き進められる生徒もいれば，なかなか書き進められない生徒もいることが予想される。そうした個人差に対応できるよう，生徒からの返答によって内容を分岐させる形で例示を試みた。

また，重要な部分は線を引く，太字にする等して強調し，ポイントが分かりやすいようにした。具体的には，①反復し，褒める，②記述内容は生徒から出させる，③肯定的な言葉がけをする，④具体的な目標を設定する，という四点を挙げた。

このキャリア・カウンセリングシートおよび前項で取り上げた振り返りシートを活用することで，生徒の自己理解を深め，今後に向けて前向きに学ぼうとする意欲を高めることができると考えた。

（３）本研究の構想

今までの内容を踏まえ，本研究の構想を図 2-6 のように表した。

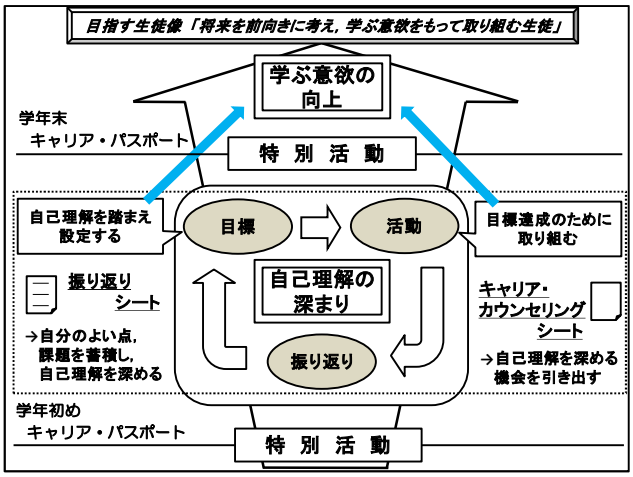


図 2-6　研究構想図

先述の通り，キャリア・パスポートを用いた実践は学年初めおよび学年末の，特別活動における学級活動の時間に実施する。大切なのは，その間を「つなぐ」ことであり，学校でのさまざまな「活動」において「目標」と「振り返り」を大切にしていくことが必要であるだろう。こうしたサイクルを積み重ねておかなければ，二回のキャリア・パスポートの実践が，ただ書くだけ，または思い出すことが精一杯といった時間になりかねない。

本研究では，特に「振り返り」をより充実したものとするために，まず振り返りシートを用い，学校行事ごとに「目標」「振り返り」そして「自己理解」に関わる内容を蓄積することを意図した。

振り返りシートの内容は，学年末でのキャリア・パスポートに記述する際の基礎資料とすることができる。生徒が学んだ内容がキャリア・パスポートに反映されるよう，普段から目標と振り返りの習慣をつけること，そして振り返りを各自で保管・蓄積しておくことが大切であると考える。

学校によっては，既に活動の記録を蓄積している例もあるだろう。こうした既存のポートフォリオもキャリア・パスポートの基礎資料とすることができる。しかし，大量のワークシートが入ったポートフォリオから，生徒がキャリア・パスポートに残したい内容を選び抜くには時間がかかる。

そこで，本研究では振り返りシートとして，「目標」「振り返り」そして「自己理解」に関わる内容を集約することで，生徒が学びのつながりや自己理解の深まりを実感し，次の取組に向けて学ぶ意欲を向上させていくことにつなげたいと考えた。

また，振り返りを行う際の教師側に対する支援として，キャリア・カウンセリングシートを用いることとした。教師との対話的な関わりにより，生徒が自己理解をさらに深め，自らの成長を実感するきっかけが生まれることを期待した。

これら二つの手だてにより，「振り返り」の内容がより充実し，生徒の自己理解を深められると考えた。こうした自己理解を踏まえ，今後に向けた「目標」を設定することで，目標達成のために，次の取組で積極的に「活動」しようとする意欲をより高めることができるのではないだろうか。

全体をまとめれば，今までに行われてきた取組を大切にしつつ，自己理解を重要な視点として「目標」，「活動」，「振り返り」のサイクルを回すことにより，学年初めから学年末の間をつなぎつつ，学ぶ意欲の向上をめざすという構想である。

以上に述べた視点を反映させながら，次章では具体的な実践の内容について述べていきたい。

(18) 藤田晃之　「キャリア教育フォービギナーズ」実業之日本社
(19) 福島脩美　「自己理解ワークブック」金子書房　2005.10.1 p.6
(20) 前掲(10)　p.53
(21) 前掲(10)　pp.148-151

第３章　実践の具体

本章では，実践の具体について述べる。研究協力校として，A 中学校，B 中学校の二校にご協力いただき，両校とも第２学年を対象として実施した。

なお，先述した本研究における「自己理解能力」（表 1-1）は，実践を形づくる視点として活用したため，その関連についても述べていきたい。

第１節　キャリア・パスポート（学年初め）

まず，キャリア・パスポート（学年初め）の授業を，特別活動の時間に行った。本稿ではB校の実践を取り上げる。授業は表3-1のような展開とした。

表3-1　キャリア・パスポート（学年初め）の展開

	生徒の活動	指導の留意事項
導入 (5 分)	○今までの学校生活を振り返り，印象に残っている出来事や場面をクラス全体で出し合う。　(全体：3 分) ○過去の学びを記録して残し，それをもとに振り返ることを通して現在の自分を見つめ，将来に向けて目標を立てることが大切であると理解する。	●今までを振り返りながら，発言しやすい雰囲気をつくる。 ●キャリア・パスポートを記述する意味について明確に伝え，生徒に配布する。
展開１ (20 分)	○キャリア・パスポートの「私の自己ＰＲ」を記入する。 →グループ内で「私の自己ＰＲ」について１分間スピーチできるよう準備する。　(個人：5 分) ○記入後，グループで順番に１分間スピーチを行う。各スピーチ後に，聞き手はスピーチに対するコメントを行い，発表者に対する気づき等を発表する。 (スピーチ１分→コメント 30 秒　×6 回分) ○スピーチ内容を考え，他者からコメントをもらうことで自己理解を深め，自分のよい点に気付くとともに今後の目標設定にも生かすことができる。 ○他者のコメントから，新たに気づいた内容があれば「私の自己ＰＲ」の欄に書き加えてよい。	●授業全体が，記入のみの時間とならないよう留意する。 ●スピーチを行う前に，自分と向き合う時間を大切にする。 ●書き進められない生徒については，授業者が普段の関わりを生かした肯定的な声かけでサポートする。ただし，無理に書かせることは避ける。 (その際，キャリア・カウンセリングシートを活用する) ●人数が違い時間が余るグループ等は，まだ書けていない項目の記入の時間に充てる。
展開２ (15 分)	○「将来の夢」，「そのためにつけたい力」および「理想の中学生のイメージ」について，それぞれキャリア・パスポートに記入する。　(個人：5 分) ○自分の将来の夢（なりたい大人）に近づくにはどのような力が必要になるか，全体で意見を共有する。 (全体：5 分)	●生徒が記入している間に，「つけたい力」について発表してもらう生徒を決めておく。 ●話し合った“つけたい力”が，終末における各自の目標設定に生かされるようにする。
終末 (10 分)	○「これからの自分・なりたい自分」について，「学習面」「生活面」「家庭・地域」「その他」における目標およびチャレンジしたいことを意思決定する。	●今までの内容を生かし，各個人がキャリア・パスポートに記入できるよう助言する。

展開を工夫した点として，自己理解に関わる内容を展開１で設定した。そして，「私の自己 PR」については一分間スピーチで伝える活動を設けた。

一分間スピーチを設定することで，発表に合わせて無理に自己PRの内容をひねり出す生徒がいるのではないかとの懸念があった。しかし，中学校第２学年という発達段階を踏まえ，発表準備として自分を見つめる機会をつくること，他者に向けて言語化することで自己理解を深めることをねらいとして設定した。また，他者からのコメントをもらう時間も設定することで，お互いが成長を実感したり，少しでも客観的な自己理解を促したりすることができる機会となるようにした。

なお，一分間スピーチの発表形式はペアもしくはグループのどちらかを担任が選び，必ず他者との交流ができるように設定した。図 3-1 は，そのうちペアワークの様子である。

図3-1　1分間スピーチの様子（ペアワーク）

このような活動を通して，B 校では「私の自己 PR」の欄に全員が記述することができていた。これだけで全員の自己理解が深まったとまでは断言できないが，全員が自分事として捉え，他者との関わりを通して自分を見つめる時間をもつことにはつながったのではないかと考えている。

生徒の「私の自己 PR」における記述の一例として，ある生徒がまとめた内容を以下に示す。

- 明るい
- たまご焼きを作るのが得意
- 好きなグループの歌詞をおぼえることが得意
- テニスを頑張っている
- 図書委員長になれるよう頑張っている

研究版 CP では，「私の自己 PR」に記述する項目として，①自分のよい点，②好き・得意なこと・もの，③頑張っていること，を挙げている。この三点それぞれについて，自分を見つめながら記述している生徒が多く見られた。学校生活に関係するか否かを問わず，さまざまな切り口から自己 PR を考えていることが，上記の例から分かるだろう。

また，他者からのコメントにより，自己 PR をさらに記述する姿もあった。多くの生徒が自己理解を深めた上で，今後の目標を意思決定していた。

第２節　間をつなぐ実践

本節では，キャリア・パスポートを用いた二回の実践（学年初め，学年末）の間をつなぐ実践について取り上げる。A 校，B 校それぞれで学校行事の種類や時期が違うため，その点を明らかにしながら順に述べていくこととする。

（１）A 校の実践―学校行事でつなぐ―

A 校では，先述した振り返りシートを活用しながら，学校行事でつなぐことを意識した実践を行った。A 校の実践の流れは図 3-2 の通りである。

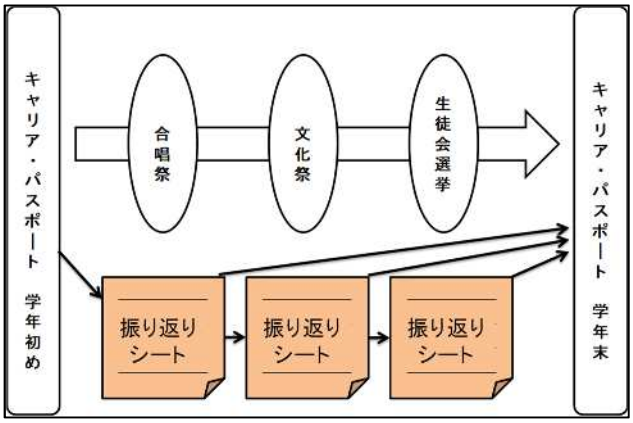


図 3-2　実践の流れ（A 校）

図 3-2 のように，A 校では大きな行事ごとに振り返りシートを用いた振り返りを実施し，蓄積することとした。キャリア・パスポート（学年末）では，蓄積された記録を学年末における振り返りの基礎資料とすることができる。また，生徒が振り返りシートを記述する際，教師は先述したキャリア・カウンセリングシートをもとに言葉がけを行い，生徒の自己理解が深まるようにした。

これらの手だてを生かしつつ，A 校において次のような授業を実践した。授業の目標は「合唱祭の取組を振り返り，文化祭に生かそう」である。文化祭取組を行う時間に，直前の学校行事である合唱祭の振り返りを行うとともに，文化祭に向けたクラス目標,そして各自の目標を意思決定した。

では授業の流れを具体的に述べる。まず教師が生徒に目標を明示し，次の文化祭へつなげていくことを語りかけた。授業の導入で目標を明示することで，生徒に目的意識が生まれ，振り返りの内容も目標に沿ったものとなることが期待できる。

そして，「文化祭に向けて，どんなクラスにしていきたいか」と問いかけ，個人で考える時間を少し取った後，グループ活動へと移った。図 3-3 は，生徒によるグループ活動の様子である。

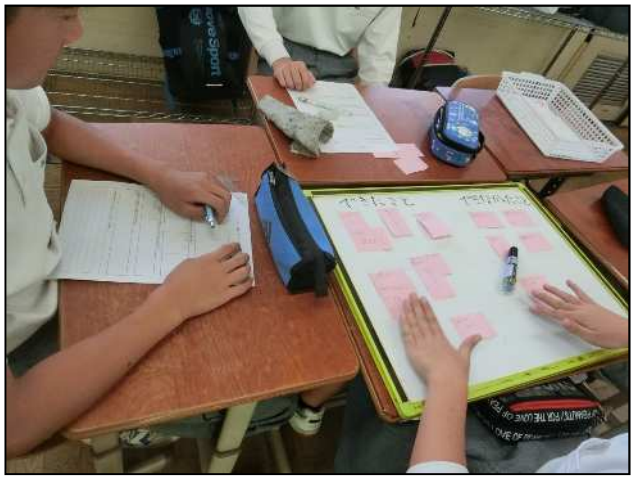


図 3-3　グループで振り返る活動の様子

図 3-3 のように，生徒は付箋を用い，合唱祭で取り組むことができた内容や，できなかった内容を挙げ，まず合唱祭について振り返りを行った。

その後，次の文化祭に向けて取り組んでいきたいことをグループごとに考え，全体で発表した。全体で共有することで，生徒はグループによって異なる意見や，共通するキーワード等を掴むことができる。最後に個人で振り返り，文化祭に向けて取り組みたいことを，各生徒が意思決定した。

以上のような振り返りを，A 校では繰り返し行った。具体的に生徒が記述した内容を，いくつか以下にまとめて示す。

＜合唱祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・来てくれる人たちに，笑顔で応答したり話したりすること。
○文化祭に向けて取り組んでいきたいこと
・人のためにできることはないかを考え，準備からがんばる。
＜文化祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・誰かと協力することはとても大切だということがあらためてわかった。
○生徒会選挙に向けて取り組んでいきたいこと
・現時点での課題は，もっと意欲的に勉強に取り組むことです。そのためには集中する力が必要なので，自主学習などをしようと思いました。

＜生徒会選挙振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・去年の自分なら絶対に挑戦していなかったと思うし，演説してみて人前で話したりそれまでの活動をすごくがんばったと思いました。私が思ってる以上にみんな応援してくれていて，頑張ってよかったと思いました。
○今後取り組んでいきたいこと（課題）
・会長や委員長などは責任感がとても必要となるので難しいけど，できれば委員会に入って，少しでも学校の役に立てるようにしたいです。

合唱祭の振り返りでは，「笑顔」「人のために」といった，先述した授業においてクラス全体で共有したキーワードが生かされている内容が多く見られた。授業を通して，自分の成長した部分に気づくことができたものと考えられる。

文化祭の振り返りでは，「あらためて」という言葉が出てきていることからも分かるように，前回の振り返りで学んだ内容をさらに深めている様子が感じられた。また，生徒会選挙に向けての課題として，勉強を今までよりも意欲的に取り組むことを意思決定した生徒が複数いた。学校での大きな行事を通して，学習面に着目し，より一層取り組んでいうとする意欲につながる可能性を示唆するものといえるのではないだろうか。

生徒会選挙の振り返りでは，立候補者や応援演説者と，その他の生徒で記述内容が違ったものになった。立候補者・応援演説者は，発表を通して得た経験を記述し，成長を感じている様子であった。一方で，その他の生徒についても，「少しでも学校の役に立てるようにしたい」といった記述が見られた。このように，それぞれの立場から得られた学びを大切にし，記録として残しておくことで，生徒の自己理解をさらに深め，今後に向けての意欲を高めることができるものと考える。

また，振り返りシートを用いた実践の中で，学びをつなぎ，自己理解を深めている生徒も見られた。以下に二名の生徒による記述を取り上げる。

まず，生徒Aの記述は以下の通りである。

＜合唱祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・自分の目標（大きな声を出して歌う）を達成するために練習できた。
○文化祭に向けて取り組んでいきたいこと
・みんなが前向きで，仲良く準備などに取り組みたい。
＜文化祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・自分がまず動くことを心がけた。自分もちゃんと動いて，他の人にも指示を出すようにした。
○生徒会選挙に向けて取り組んでいきたいこと
・自分たちの代ということで，前で話してる人の話をしっかり聞きたい。
＜生徒会選挙振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・△△さんと協力して，どのようにしたら思いが伝わるかを考えられた。とにかく，悔いなく終わることを目標にできた。

生徒Aは，まず合唱祭でがんばったところとして，自分の目標達成に向けて取り組んだことを挙げており，自己理解を深めている様子が分かる。

そして，次の行事である文化祭に向けて，みんなで準備などに取り組むことを意思決定した。先ほどは「自分」の目標であったが，今回は「みんな」を意識した目標へと視野を広げている。

そうした目標をもち文化祭に向けて取り組む中で，みんなが前向きに，仲良く準備を進めるためには「自分がまず動く」とともに，「自分もちゃんと動いて，他の人にも指示を出す」ことが大切であることに気づいたものと考えられる。前の取組での振り返りを踏まえて目標を設定し，行動に移したことが分かり，生徒Aが学ぶ意欲を向上させた様子として捉えることができるであろう。

また，生徒Aは当初，生徒会選挙では話を聞くことを取り組んでいきたい内容として挙げていた。しかし，自分が演説することとなり，「どのようにしたら思いが伝わるか」を友達とともに考えることをがんばった様子が分かる。このように，生徒Aはそれぞれの学校行事を通して，他者と協力することが重要であると実感し，協力するためにも自分はどのように取り組んでいくことが大切かという点に視野を広げているものと捉えられる。

次に，生徒Bが合唱祭から文化祭へと学びをつないだ振り返りについて取り上げる。記述内容は次頁の通りである。

＜合唱祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・今までは合唱祭なんてめんどくさいとか思っていたけど，今回の合唱祭は自分から取り組んで，放課後残って練習したりみんなで朝練などして，とても良い思い出になった。
○文化祭に向けて取り組んでいきたいこと
・今回の合唱祭で団結力ができ，まとまりができたかなと思いました。合唱祭を生かしてこのまとまりを文化祭に生かす。
＜文化祭振り返り＞
○今までに比べてがんばった点，新たな発見
・周りの人と協力することによって仕事がはかどる。今までの経験を生かして，文化祭は今まで以上にがんばれた。
○生徒会選挙に向けて取り組んでいきたいこと
・学校を支える一人として選挙によって学校が変わるということを知り，より良い人に生徒会本部を任せたいです。

生徒Bは，合唱祭について昨年度はあまり前向きでなかったが，今回はみんなで練習する中で良い思い出をつくることができたと振り返っている。次の文化祭に向けては，合唱祭を通してできた団結力を生かしていていくことを課題としている。

そうした「今までの経験を生かし」，文化祭では今まで以上にがんばる中で，周りの人と協力することの大切さに気づいた。次の生徒会選挙に向けては，自分は立候補しないものの，「学校を支える一人」としての自覚を持ち，今後も前向きに取り組んでいく意欲を高めている様子が読み取れる。

以上のように，学校行事ごとに振り返りシートを蓄積する中で，生徒が自己理解を深め，今後に向けて学ぶ意欲を高めている様子が見られた。こうした振り返りを繰り返すことで，本研究における「自己理解能力」のうち，「思考力・判断力・表現力等」（自分を振り返り，良い点を伸ばし，課題を受け止め，克服していくことができる力）の育成につながると考えられる。

（２）B校の実践―生き方探究・チャレンジ体験を中心としてつなぐ―

B校では，1年を通して，「働くこと」に焦点を当てた取組を積み重ねたいとの思いがあり，その中心として生き方探究・チャレンジ体験が位置づけられていた。職場体験を中心としつつ，他の学校行事等も関連をもたせながら進めていくことが計画された。実践の流れは図3-4の通りである。

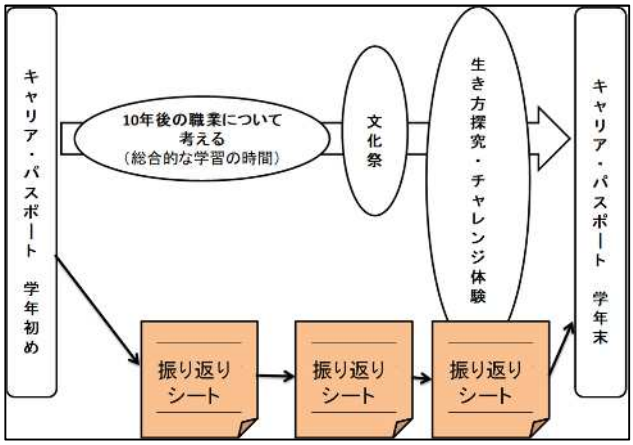


図3-4　実践の流れ（B校）

図3-4のように，B校では「働くこと」に焦点を当てた総合的な学習が展開される中で，チャレンジ体験に向けた事前学習や文化祭での学年発表が実践された。その中心として位置づけられていたのが生き方探究・チャレンジ体験であり，事前・事後学習を充実させるように計画されたといえる。このような流れではあるが，自己理解を視点として学びをつなぐ点は変わらず重視し，振り返りを蓄積することで自己理解を深め，今後に向けて前向きに学ぼうとする意欲を高めたいと考えた。

以下，時系列に沿って，B校での実践例をいくつか挙げることとする。

①「10年後のケーキ屋さんについて考える」

キャリア教育の一環，そして生き方探究・チャレンジ体験の事前学習として，総合的な学習の時間に，10年後の未来を想像する授業を行った。

B校では，以前に「キャリア講座」として，いくつかの職種から講師を招き，それぞれの職業について話を聞く機会があった。その時に，約半数の生徒がケーキ屋さんの話を聞いていた。この授業は，「キャリア講座」での学びをつなぐことを意図しつつ，未来の職業について考える中で，将来を見通す意識を高め，今後に向けて各自が取り組んでいく内容を意思決定することをねらいとした。

生徒はケーキ屋さんを例として，ケーキ屋さんに関わる仕事を挙げた後，それらを「人の手で行いたい仕事」，「AI（機械）に任せたい仕事」に分ける活動を行った。例えばあるグループでは，次頁のように仕事を分類していた。

＜人の手で行いたい仕事＞
・接客
・デザイン
・ケーキを作る
＜AI（機械）に任せたい仕事＞
・材料などの運送
・商品の補充
・掃除

グループ毎にさまざまな意見があったが，クラス全体としては，ケーキを作ることに関わる仕事および接客は人の手で行い，お店の管理・運営に関わる仕事はAIに任せたいという方向性であった。

その後，内閣府が提唱する「society 5.0」の動画を視聴した。AI 等の科学技術の進歩が著しい中で，それでも人間ができる（やりたい）仕事は何なのか一人ひとりが考えることを通して，将来に向けての意識を高める様子が見られた。この取組は，本研究における「自己理解能力」のうち，「知識・技能」（自己の適性・役割の理解）にあたると考える。将来も見通した上で，自分には何ができるのか，どのようなよい点や強みがあるのか考えることが大切であると考えるからである。

授業後，生徒は振り返りを記述した。その中から，具体的に生徒が記述した内容を以下に示す。

○今までに比べてがんばったところ
・今までは職業についてあまり考えたことがなく，未来の仕事についてもあまり興味がなかったけど，AI になるかもしれないということや世界に色々な職業があるということを一生懸命考えることをがんばりました。職業についてはまだ関係ないと思っていたけど，お話を聞いたりして自分のしたい仕事などを考えていきたいです。
○これから取り組んでいきたいこと（課題）
・今，私は，元気にあいさつ，返事をすることができていないことがあるので，チャレンジ体験までに元気よくあいさつ，返事をするということが課題です。私は接客業をするので人とていねいに会話をするようにしたいです。

今まで職業あるいは将来についてあまり考えたことが無かったという振り返りは，この生徒だけでなく数名が記述していた。今回の授業が今後について考えるきっかけとなったこと，そして AI について学び，考えることを通して，自分が直面するであろう将来について，自分事として捉えながら見通す機会につながったことが分かる。

そうした内容を踏まえ，生き方探究・チャレンジ体験に向けて取り組んでいきたいことを意思決定していた。先述の通り，生徒は人の手で行いたい仕事の一つとして接客を挙げており，AI の進歩があったとしても，人と人とのやり取りを大切にしたいという思いを持っている生徒が多かった。このような内容も影響して，「元気にあいさつ，返事をすること」や「人とていねいに会話をする」ことを今後の課題として挙げたものと捉えられる。

②文化祭取組

文化祭に向けた学年での取組（舞台発表，展示発表）も，「働くこと」をテーマとして進められた。舞台発表では，「10 年後の自分はどうなっているのか」「AI とはどう向き合っていけばよいのか」を主題とした劇を披露した。また，チャレンジ体験に向けての事前学習の内容をポスターにして展示物をつくり，将来について生徒それぞれが考えを深めた。図 3-5 は展示発表の様子である。

図 3-5　展示発表の様子

そして，文化祭後に振り返りを行い，生き方探究・チャレンジ体験につなぐことを意図した。生徒の中には以下のような内容の記述が見られた。

○今までに比べてがんばったところ
・私が今までに比べてがんばった所は，初めて文化祭でクラス発表をして，ゆっくり話したりとか，人に伝わるにはどうしたらいいのかなどを考えるのをがんばりました。

・実際に前に出て発表するためにどうしたら分かりやすくなるのか，どうしたら興味を持ってくれるのかなどを考えながら文章をつくることは難しかったけれど，結果的によいものができたと思う。今回学んだ考える力や伝える力を今後に生かしていきたい。

○これから取り組んでいきたいこと（課題）

・僕がお世話になるところは消防署であるので今自分の課題の一つである「時間を大切にして行動する」を改善していかないと一つ一つの動きが遅れる可能性があるので，5 分前行動などを積極的に取り組み，すばやい動き方をできるだけ早めに身につけておきたい。

・弱音を吐かず自分のやるべきことをしっかりとこなしていきたいです。また，人に見られるところで体験するので，いつも以上に気をくばって行動していきたいです。

舞台発表あるいは展示発表に向けて，学んだ内容をまとめる中で，「考える力」や「伝える力」を身につけたり，のばすことができたと振り返る生徒が多かった。また，生き方探究・チャレンジ体験に向けて，自分が今取り組むべき課題を挙げ，当日に向け意識を高めている様子が窺えた。

③生き方探究・チャレンジ体験

以上のような事前学習を経験した上で，生徒は生き方探究・チャレンジ体験に臨んだ。事後学習における振り返りにおいて，以下のような内容を記述する生徒の様子が見られた。

・チャレンジ体験を通して僕は，お金をかせいでくれる，親への感謝を改めて感じました。事業所の人たちは，一番にお客さんのことを考えていたので，僕も，大人になって仕事についたら，お客さんのことをしっかりと考えれるようになりたい。お店の人やお客さんと関わることで礼儀の大切さを改めて学びました。これからの学校生活で，チャレンジで学んだ礼儀を意識して過ごしていきたい。

・僕はこの生き方探究チャレンジ体験を終えていろいろな事を学びました。例えば，働くということは，ただお金をもらうだけではなくて，その仕事のやりがいをみつけることだと思いました。その他にも，初めは，あまりできなくても努力することによりだんだんできてくることがわかりました。

生き方探究・チャレンジ体験を通して，親への感謝，礼儀の大切さ，仕事のやりがいを見つけること等について気づいている。それだけでなく，これからの学校生活で生かしていくことを意思決定している点や，自分が努力することによって成長を実感している点も注目すべきであり，生徒それぞれが自己理解を深め，今後に向けて積極的に学びをつなげていこうとする様子が感じ取れる。

このように，ただ体験のみとするのではなく，自己理解を重要な視点として振り返りを蓄積することにより，生徒の自己理解をさらに深め，学ぶ意欲を向上させることにつながると考えられる。

第３節　キャリア・パスポート（学年末）

前節のような両校での実践を経て，キャリア・パスポート（学年末）の授業を実践した。

両校ともに，学年初めの実践を土台とし，さらに自己理解を深めることを重点に置き，特別活動の時間に実施した。授業展開は表3-2の通りである。

表3-2　キャリア・パスポートの展開（学年末）

	生徒の活動	指導の留意事項
導入 １０分	【準備物：振り返りシート】 ○今までに記入した振り返りシートを見ながら，「印象に残った出来事や場面」と「選んだ理由」を記入する。 （個人：５分） ○記入後，代表者数名が発表する。　（全体：５分）	●蓄積した振り返りシートを見返すことを通して，自分の成長が実感できるようにする。 ●教師は対話的に関わりながらフォローするとともに，様子をみて発表者を決定する。
展開１ ２０分	【準備物：キャリア・パスポート（学年初め）】 ○導入を踏まえ，以前記入したキャリア・パスポートの内容も見ながら，今回のキャリア・パスポートにおける，“自己理解”に関わる箇所を記入する。 「理想の中学生にどれくらい近づけたか」 「中学２年生になって新たに成長・発見したこと」 ○「中学２年生になって新たに成長・発見したこと」がグループ内で１分間スピーチできるよう準備する。 （個人：５分） ○記入後，グループで順番に１分間スピーチを行う。各スピーチ後に，聞き手はスピーチに対するコメントを行い，発表者に対する気づき等を発表する。 （スピーチ１分→コメント３０秒　×６回分）	●授業全体が，記入のみの時間とならないよう留意する。 ●スピーチを行う前に，自分と向き合う時間を大切にする。 ●書き進められない生徒については，授業者が普段の関わりを生かした肯定的な声かけでサポートする。ただし，無理に書かせることは避ける。 ●他者からのコメントは，「他者から新たに学んだこと」の欄に記入する。グループ毎に人数が違い時間が余るグループ等は，記入の時間に充てる。
展開２ １５分	【準備物：生き方探究・チャレンジ体験の蓄積資料】 ○チャレンジ体験の冊子や振り返りシート等を見返しながら，将来の自分（３０歳の私）をイメージする。 「３０歳のとき，どんな自分になっていたいか」 「そのために身につけたいと思う力」 （個人：５分） ○将来の自分のイメージに近づくためにはどんなことが大切か，ペアワークで話し合う。　（ペア：３分） ○話し合った内容を発表し，クラス全体で共有する。 （全体：７分）	●机を元の配置に戻しておく。 ●以前振り返りシートに書いた内容と，今回記入する内容が変わってよい。現在の自分の考えと比べることを通して，自己の変容が感じられるようにする。 ●授業全体を通し，肯定的に認め合う雰囲気を大切にする。 ●グループおよびペアワークで将来の自分を想像し，前向きに取り組む態度を育成する。
終末 ５分	○今までの内容を生かし，「今，頑張りたい・チャレンジしたいこと」を記入し，意思決定する。	●今までの内容から，キャリア・パスポートに記入させる。

今回の授業においても，ペアあるいはグループでの活動および一分間スピーチを行った。学年初めではなかなか自己理解の項目を書き進めることができなかった生徒も，学年末の「新たに成長・発見したこと」の項目に記述する姿が見られた。

そして，記述する際の基礎資料として，キャリア・パスポート（学年初め）に加え，蓄積していた振り返りシートを用い，学年末の振り返りに反映させている姿も見られた。研究版CPにおける「中学2年生になって新たに成長・発見したこと」の項目に，A校では，次のような記述が見られた。

・考えが少し変わったと思う。“当たり前”は当たり前と言われるかも知れないけど，決して当たり前じゃないから，色んなことに感謝しないと，と思った。
・後輩ができて責任感が強くなった。
・授業中あまり集中できていなかったことを踏まえて，しっかり集中することができた。

学年初めと同様，学年末も自己理解に関わる項目として，生徒によりさまざまな角度から成長を感じていることが分かった。ほとんどの生徒が，学年初めのときよりも積極的に，自力で書き進めることができていた。中には書き進められない生徒もいたが，その後のスピーチで他者からのコメントをもらい，「他者から新たに学んだこと」の欄に書いている姿があった。なかなか記述できないような生徒も，他者と交流することで自己を見つめる機会となることが見て取れた。

交流の土台として，以前の取組における振り返りを蓄積しておくことで，学年末の振り返りが生徒にとって「何となく」のものではなく，より具体的な内容になると考えられる。その内容は次年度へとつながり，自分の成長を実感しながら，さらなる目標を立てることができるため，今後に向けて前向きに取り組んでいく意欲を高めることにつながるであろう。これは，本研究における「自己理解能力」のうち「学びに向かう力・人間性等」（前向きに考える力，主体的に行動し，進んで学ぼうとする力）にあたり，キャリア・パスポートによって生徒が自己評価できると考えられる。

そして，キャリア・パスポートを毎年積み重ねることにより，継続的に自分を振り返ることができる。少しずつでも将来に向けての意識を高め，将来のためにも今を大切にして取り組む意欲を高めることが大切であるといえる。

また，振り返りを行う際に，生徒の自己理解がより深まるよう，教師はキャリア・カウンセリングシートを活用した言葉がけを行った。図3-6は，担任からの言葉がけの場面である。

図3-6　振り返りにおける教師からの言葉がけの場面

担任（T）は，今までの振り返りシートへの記述内容および普段の関わりから，生徒（S）に言葉がけを行うことを授業前から計画していた。実際の授業における対話の内容は以下の通りである。

T：この「めんどくさい」時ってどんな時かな？もっと具体的に書けたら良いね。どんな時にめんどくさく無くなる？
S：えー。（自信なさげに「ポジティブに考える」と記述する）
T：何でもポジティブに考えていくってことやな。良いと思う。「勉強めんどくさい」ってならずに，勉強したら自分のためにもなるって思うしね。
S：（大きく頷く。自分なりに整理できた様子）
T：それをもとにして書き進めてみたら？
S：（キャリア・パスポートをじっと見つめる。少し経ってから）あっそうか部活もか…。

この対話から，担任はキャリア・カウンセリングシートに書かれたポイントの四点（①反復し，褒める，②記述内容は生徒から出させる，③肯定的な言葉がけをする，④具体的な目標を設定する）を意識して言葉がけを行っていることが分かる。

担任との対話を通して，この生徒はまず研究版CPの，「将来の自分（30歳の私）を想像しよう」の各項目に，以下のような記述を書き進めた。

<u>○30歳のとき，どんな自分になっていたいか。</u>
・めんどくさがらない。

○そのために身につけたいと思う力
・ポジティブに考える
○今，頑張りたい・チャレンジしたいこと
・部活

生徒は，担任からの言葉がけをもらうまでは，「めんどくさがらない」とだけ書いている状態であった。担任はこの記述を切り口とし，より具体的な内容となるよう対話を進めた。

担任は生徒が書いた「ポジティブに考える」という記述に対し,学習面を例として肯定的に捉え,それをもとにして書き進めるよう促した。この生徒は,研究版 CP の上段にある「印象に残った出来事や場面」の項目に，部活動を挙げている。対話を進めるうちに，自分がなぜ「ポジティブに考える」ことを身につけたいと思ったのかが整理され，より具体的な目標になったものと考えられる。

そして，この生徒の自己理解に関わる項目について，次のような記述が見られた。

○中学 2 年生になって新たに発見したこと
・がんばってきたけど，負けるのがくやしい。（部活）
○他者から新たに学んだこと
・きょうふ。 →強くなるために。

担任との対話の後，「強くなるために」の一言を，もともと書いていた内容に書き加える姿が見られた。対話をしていくうちに，自分にとって部活動が思考の中心にあり，時には厳しく指導されることがあっても，全て自分がさらに成長するためなのだと「ポジティブに考える」ことが大切であることに気づいたのである。そうした気持ちを感じ，より具体的な記述となるように書き加えたものと考えられる。

キャリア・パスポートにどれほどの記述ができるかは，生徒によりさまざまである。この生徒は一行記述することがそれほど簡単なことではなかったと思われる。そうした中で，教師と対話することにより少しでも具体化された内容を書き残せたことは，この生徒にとって大きな自己理解の深まりであり,今後につながるのではないだろうか。

以上より，キャリア・カウンセリングシートをもとにした言葉がけを通して，生徒が自己理解をさらに深め，キャリア・パスポートへの記述を進めていくきっかけとなり得ることが示唆された。

次章では，本章で述べた実践から得られた成果や課題，今後の展望について述べていきたい。

第４章　研究の成果と課題

第１節　研究の成果

（１）生徒の記述内容から

実践を通して，生徒は振り返りを記述し，蓄積した。その中から変容が見られた内容を取り上げ，研究の成果としたい。以下，振り返りシート，そしてキャリア・パスポートに分けて述べる。

①振り返りシート

第 3 章において，生徒による振り返りシートの記述内容を示しつつ，本研究で取り組んだ実践を挙げた。生徒は振り返りを積み重ねることで，自己理解を深め，次の取組に向けて積極的に目標を立てることができていた。

特に，第 3 章第 2 節で取り上げた生徒 A および生徒 B の記述から，振り返りシートを蓄積することで，学校行事での学びをつなぐことができると分かった。全員にそのことが意識化されたわけではないが，教師にとっては生徒理解のツールとして，振り返りシートが活用できると考えられる。

また，B 校では，振り返りシートに関して，次のような項目でアンケートを行った。調査結果を以下に図 4-1，4-2，4-3 として示す。なお，対象人数は全ての項目において 58 名である。

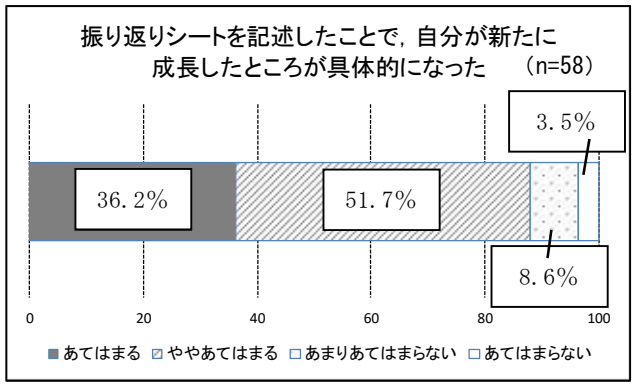


図 4-1　アンケート結果①（肯定的な自己理解）

まず，図 4-1 の結果から，約 9 割の生徒が，振り返りシートによって「自分が新たに成長したところ」,つまり肯定的な自己理解に関わる内容が具体的になったと感じられたことが分かった。

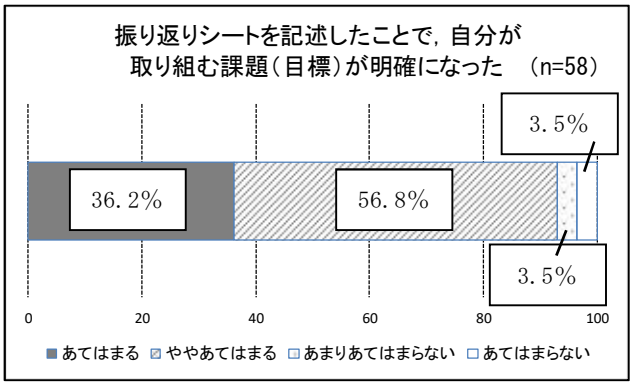


図 4-2　アンケート結果②（課題に対する自己理解）

次に，図 4-2 の結果から，9 割以上の生徒が，振り返りシートによって自分の課題（目標）が明確になったと感じられたことが分かった。本研究で重点化した自己理解にあたる内容について，ほとんどの生徒がより具体的なものとなったことを実感しており，一定の成果として挙げられよう。

そして，振り返りシートとキャリア・パスポートとの関わりについても調査した。その結果が以下の図 4-3 である。

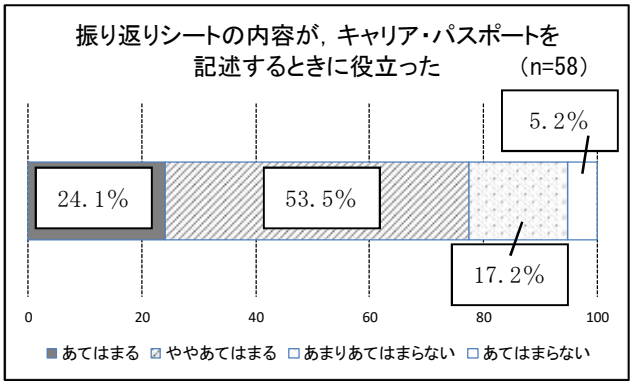


図 4-3　アンケート結果③（振り返りシートの活用）

図 4-3 の結果から，約 8 割の生徒が，蓄積した振り返りシートの内容がキャリア・パスポートの記述に役立ったと感じられたことが分かった。振り返りシートに記述し，蓄積することを通して，生徒が自己理解を深め，次の取組に向けて学ぶ意欲を高めることにつながった様子は先述した。そのように蓄積した記述を，ほとんどの生徒がキャリア・パスポートに反映させている姿が窺えた。

しかし一方で，約 2 割の生徒については，振り返りシートが役立ったと実感できなかったことになる。この結果は，今回の振り返りシートが学校行事をもとに学びをつないだことが影響しているものと考えられる。生徒によっては，キャリア・パスポートへの記述として，例えば部活動等の場面について取り上げた内容も見られた。このように，学校行事以外の場面を中心として記述した生徒にとっては，今回蓄積した振り返りシートの内容をあまり反映させることが無かったので，役立ったと感じづらかったのではないかと考える。

以上のアンケート結果から，ほとんどの生徒が振り返りシートへの記述によって，自己理解を深めたり，記述した内容をキャリア・パスポートに反映させたりすることができたと分かった。

②キャリア・パスポート

本項では，キャリア・パスポートに関わる成果を，記述内容，アンケート結果の順に取り上げる。

まず，キャリア・パスポートの自己理解に関わる項目における記述内容の変容（自己理解の深まり）について，一人の生徒を例として取り上げる。この生徒は，まず学年初めの研究版 CP における，「私の自己 PR」の項目に，次のように記述した。

> ○私の自己 PR
> ・真面目

思いつく内容として，何とか「真面目」と一言書き記した印象であった。学年初めの段階では，自己理解にあまり積極的でない様子が窺えた。

その後，この生徒はさまざまな取組を経験し，振り返りを蓄積した。そして，学年末の研究版 CP における，「中学 2 年生になって新たに成長・発見したこと」の項目に，次のような記述を残した。

> ○中学 2 年生になり新たに成長・発見したこと
> ・自分の生き方や，大切なことを発見することができた。例えば，人のことを考えるということを学び，少しだけ成長できたような気がします。

この生徒は，研究版 CP において，「印象に残った出来事や場面」として生き方探究・チャレンジ体験を挙げており，その時に記述した振り返りシートの内容を反映させている姿があった。「人のことを考える」といった「大切なことを発見することができ」ており，新たな発見を具体的に記述している。ここに自己理解の深まり，変容を見取ることができるであろう。そして，それらの発見により，「少しだけ成長できたような気がします」と，自身の成長を実感することもできている。

このように，学年初めから学年末にかけて振り返りを記述し，蓄積する中で，徐々に内容が具体化していき，自己理解を深め，成長を実感することにつながった生徒の様子や記述が見られた。

また，キャリア・パスポート（学年末）の実践終了後，B 校の生徒に「学ぶ意欲」に関わるアンケートを実施した。調査結果は以下の図 4-4 の通りである。なお，対象人数は 58 名である。

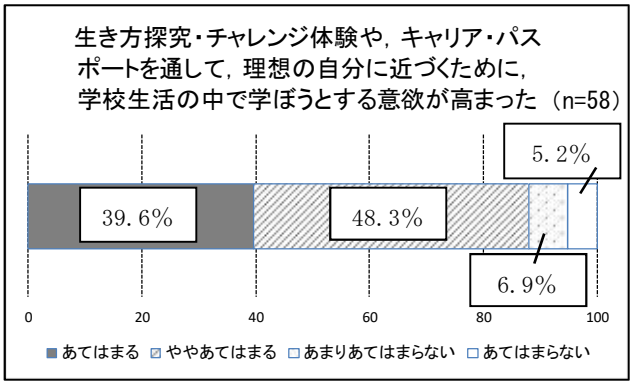


図 4-4　アンケート結果④（学ぶ意欲の向上）

図 4-4 の結果から，約 9 割の生徒が，生き方探究・チャレンジ体験やキャリア・パスポートを通して，学ぼうとする意欲の高まりを実感できたことが分かった。本研究の実践により，ほとんどの生徒に対し自己理解の深まりとともに，学ぶ意欲の向上にもつなげることができたと考えられる。

（２）教師（大人）の対話的な関わりから

キャリア教育を進める上で重要である，教師との対話的な関わりについても成果をまとめておく。

本研究において，生徒の自己理解を促し，深めるような教師からの言葉がけの例示としてキャリア・カウンセリングシートを活用した。具体的な対話については，第 3 章第 3 節に取り上げた。

実践後，第 3 章で挙げた生徒，担任双方にインタビューを行った。まず生徒にインタビューすると,「振り返りの活動は過去にも数多く取り組んでいるが，キャリア・パスポートでの振り返りは今までよりも具体的な感じがした」と語っていた。教師との対話的な関わりがあったからこそ，記述をより進めることができ，今後に向けて大切にしたい内容が具体的になったのではないだろうか。

また，自分の立てた目標については，「今までよりも，少しは達成に向けて努力していきたいと思っている」と語っていた。今回の振り返りを通して自己理解を深め，今後に向けて前向きに取り組む意欲を高めることができたといえるであろう。

そして，担任にもインタビューを行った。実践の成果として，①振り返りシートはキャリア・パスポートの記述に向けた記録の蓄積という役割だけでなく，普段の生徒理解に役立てることができること，②それにより，キャリア・カウンセリングシートを用いた対話的な関わりをいつ，誰に行うことが適切かを自分なりに判断する材料となったこと，③生徒に対する言葉がけの内容が変わるとともに，生徒に対する見方が肯定的なものに変わってきたことを挙げた。これらの成果を生かし，継続的に生徒理解を行い，一人ひとりのキャリア形成につながるよう取り組むことが大切である。

こうした「教師との対話的な関わり」についても，生徒にアンケートを実施した。調査結果は以下の図 4-5 の通りである。なお，この質問については実際に教師との対話を行った生徒のみが回答したため，対象人数は 39 名であった。

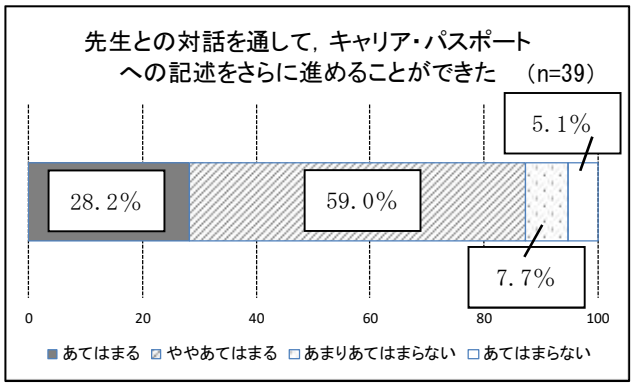


図 4-5　アンケート結果⑤（教師との対話的な関わり）

図 4-5 の結果から，教師との対話的な関わりがあった生徒のうち，8 割以上がキャリア・パスポートの記述に効果があったと感じていたことが分かった。また，生徒の総数が 58 名であったことから，実に 7 割近くの生徒が限られた授業の中で教師との対話があったと感じていたことも分かった。生徒の実態に合わせ，教師が対話的に関わることが有効であると捉えられるのではないだろうか。

第２節　課題と今後の展望

（１）実践から明らかになった課題

本研究を通して，キャリア・パスポートの実践をより効果的なものとするために，振り返りシートおよびキャリア・カウンセリングシートを活用することの有効性が示唆された。しかし，次のような課題も明らかになった。

①どの取組を振り返りの対象として設定するか

本研究では，生徒の自己理解を深めるため，学校行事を中心に学びをつないだ。各学校によって，学校行事は種類・時期ともに異なるため，どの取組で振り返りシートによる振り返りを蓄積していくか，あるいは蓄積するのが有効であるかについては，検証していく余地があると考えられる。

つまり，振り返りの充実に向けて，回数および時期をどうするか，そして教師からの言葉がけにより，どのような意識づけを行っていくかが大切であり，今後の課題として挙げられると考える。

②学ぶ意欲の向上をより詳細に見取ること

研究協力校における生徒の様子や記述の変容から，自己理解を深め，学ぶ意欲を向上させるきっかけを生み出すことができたことは先述した。今後はより具体的に，実践から「きっかけ」を得た生徒がどのように変容し，学校生活を送る姿が見られたかなどを追っていきたいと考えている。

キャリア・パスポートは学年・校種をまたいで持ち上がることで，継続的に自己理解を促し，以前と比べて成長を実感しながら将来に向けての意欲を高めることが期待されている。今回の研究を次年度に生かし，生徒がキャリア・パスポートを引き継ぐことによる効果や，将来に向けてどのように意識を高めていくか，引き続き研究していきたいと考える。そして，本研究では中学校第２学年を対象としたので，第１および第３学年も対象として研究を進めることが必要となるだろう。

（２）今後に向けて

最後に，今後の展望を三点に分けて述べる。

①各教科等でのキャリア教育の実施および検証

本研究では，おもに学校行事でつなぎ，キャリア教育を進める一提案を示したが，キャリア教育は学校教育全体で進めるものである。各教科等においても，振り返りの内容を生かしたり，キャリア教育の視点を踏まえた授業を提案したりすることで，一層「つなぐ」視点が明確になると考える。

キャリア・パスポート（学年初め）や，間をつなぐ実践の中で，学習面の目標を積極的に記述する生徒の様子が見られた。学校行事等だけでなく，各教科等の授業で学んだ内容もキャリア・パスポート（学年末）に反映させることができれば，より多面的に成長を実感し，自己理解を深めたり，学ぶ意欲を高めたりすることにつながるであろう。

②キャリア・カウンセリングシートの，振り返りを行う場面以外での活用

キャリア・カウンセリングシートについては，本稿の図 2-5 として示したが，生徒がキャリア・パスポートや振り返りシートを書き進める際に，教師からの言葉がけを行う具体例として活用した。今後は振り返りの場面だけでなく，各教科等の授業や，日常的な言葉がけ等，他の場面でも活用できるようなシートを作成・検証していきたいと考えている。

先述した通り，どの場面，どの生徒にも効果があるような言葉がけは存在しないであろう。その点に注意を払いつつ，さまざまな言葉がけの例を提示し，実践を積み重ねることで，さらなるキャリア教育の充実につながるのではないだろうか。

③京都市版キャリア・パスポートの活用

キャリア・パスポートは令和２年度より取組が開始されるが，本市でも京都市版キャリア・パスポートである「生き方探究パスポート」が示された。その活用についても，本研究で得られた知見を生かしつつ，検証していきたいと考えている。

全国を見渡せば，既に独自のキャリア・パスポートを作成している自治体もあるが，本研究で重点化した「目標」,「振り返り」そして「自己理解」に関わる項目はどのキャリア・パスポートにも盛り込まれているのではないだろうか。先述の通り，キャリア・ポスポートは生徒にとって，自己理解を深めるためのものだからである。したがって，各地でさまざまなキャリア・パスポートが存在したとしても，本研究でポイントとして挙げた内容がどこかで役に立つのではないかと考えている。

おわりに

本研究では，各学校において今まで行われてきた取組を大切にした。取組後の「振り返り」においてポイントとなる視点や，全体の流れ等が少しではあるが示せたのではないかと考えている。令和２年度からのキャリア・パスポート導入に向けて，少しでも参考になる部分があれば幸いである。

最後に，キャリア・パスポートに関わる実践を通して，生徒が少しでも成長を実感し，前向きに取り組む姿が見られることを目指し，共に話し合いを重ね，貴重なご意見，そして実践をいただいた研究協力校の皆様に心より感謝申し上げる。